文芸研究――文芸・言語・思想――

第一八三集（平成二十九年三月）目次

特集・一九二〇年代の文化と思想

グローバル化と大衆化の一九二〇年代……山﨑義光…一
――錯綜としての中間という問題圏――

大正デモクラシーにおける共同（協働）性の再編……大川真…一四

アナキズム詩の場所……村田裕和…二七
――小野十三郎『半分開いた窓』における〈不穏な郊外〉

「都市」という共通分母……田口律男…三九

伝統芸能者の「遺言」にみる国民文化……鈴木啓孝…四九
――平曲家・館山漸之進の「情願書」を素材に――

周辺的な接続辞「かぎり」の機能……劉川菡…七七
――内容語「かぎり」との関連性をめぐって――

〔書評〕

大川真著『近世王権論と「正名」の転回史』……中村安宏…七八

伊藤守幸著『更級日記の遠近法』……小島雪子…八〇

鳴海伸一著『日本語における漢語の変容の研究　副詞化を中心として』…後藤英次…八二

松本和也『昭和一〇年代の文学場を考える　新人・太宰治・戦争文学』…高橋秀太郎…八四

日本文芸研究会　研究発表会　発表要旨……八六

表紙　土井晩翠宛夏目漱石書簡（東北大学附属図書館蔵）

特集・一九二〇年代の文化と思想

グローバル化と大衆化の一九二〇年代
――錯綜としての中間という問題圏――

山﨑義光

一　テーマ趣旨

第六八回研究発表大会（二〇一六年六月十一日、秋田県カレッジプラザ）にてシンポジウム「一九二〇年代の文化と思想」が行われた。本稿は、当日の司会を任された立場から、事前に想定し当日説明したテーマ趣旨と各発表の位置づけを補足しながら提示し、それを踏まえつつ、事後あらためて本シンポジウムで問われた問題領域について再考したことを述べてみたい。

「一九二〇年代」は和暦で言えば大正九～昭和四年にあたる。およそ明治維新から五〇～六〇年、現在からみて九〇～一〇〇年前である。社会背景からいえば、一九一八年の第一次世界大戦後から一九二九年にアメリカではじまる世界恐慌、そして三一年に起こる満洲事変までを想定した。年代という枠組みは、空間的距離のある場所や直接的な因果性を欠いてみえる事象の間に、世界の連動による同時性という括りにおいて関連性や差異を考量する捉え方を可能にするだろう。

この時期を特徴づけるのは、政治・経済を含む文化の〝グローバル化〟と〝大衆化〟である。

地球全体（グローバル）が「世界」として連動するグローバル化（世界的同時性）を顕在化させたのが第一次世界大戦だった。[1] その前後から新たな世界秩序の構想も活発になった。一九二〇年には国家を単位とする国際社会の協調機関として国際連盟が設立され、保健衛生、知的交流などの国際的ネットワークも形成された。[2] 一方、戦争を引き起こした要因としての資本主義・帝国主義への批判から、マルクス主義の政治・経済理論が新たな理想社会像を与え、ソ連の誕生はそれに現実味を与えた。一九一九年には第三インターナショナル（コミンテルン）が設立された。日本へも雑誌『種蒔く人』が、こうした動向を日本へ伝える役割を果たした。

一方、欧米の近代国民国家によって先進的に形成された民主主義・資本主義といった政治・経済システムは、第一次世界大戦における総動員体制において、国民大衆の存在を顕在化させた。日本でも、

産業の大規模化が都市への人・物・金の集中をもたらし、商品としての労働を産業構造に組み込んで、無産階級労働者とともに大量生産された物を消費する大衆を生み出した。

坂野潤[3]は、大正デモクラシーの気運を高め、普選成立を促した経済的背景にある税収源の変容に言及し次のように指摘した。「所得税総額が地租総額を上廻ったのは第一次大戦中の一九一七年であるが、その三年後の一九二〇年に普通選挙制が衆議院の中心争点となった時には、所得税は地租の二・五倍になっており、一九二八年に男子普通選挙制の下で最初の総選挙が行われた時には、約三倍になっている」。地主（地租）から資本家（所得税）への税基盤の推移は、資本家のもとで労働する階級を含む都市社会層の比重が高まったことを意味する。そうしたなか、無産労働者・農村小作・都市中間層といった大衆の顕在化がすすむ。政治的課題は参政権の拡大だった。一九二五年の普通選挙法成立により、納税条件を撤廃することで成人男子に選挙権が認められた。有権者総数は概数で約三〇〇万から約一二〇〇万へ約四倍の増加。小作も入れた農民数が約五五〇万、労働者約三一〇万、残りの約三四〇万ほどの都市中間層が選挙権をもったという。

こうした政治基盤と制度の変化のなかで、デモクラシーの理論を展開したのが吉野作造だった。来たるべき公民権の大衆的拡大を憲政のなかに位置づけ、政治的な主体としての義務と権利を有する市民たる要件や意義を論じた。一方、アナキストや社会主義者たちの活動があった。また、産業構造のなかに組み込まれた無産労働者（プロレタリアート）の組織的な労働運動が生活条件改善にむけた動きをみせた。そして、ロシア革命によるソ連の成立は、政治的な革命を志向する運動（ボルシェビズム）の気運を高めた。アナキストと組織的革命運動との対立（アナ・ボル論争）も生じた。

二　三つの観点と発表の位置づけ

こうした背景のなかで交錯した文化と思想について、シンポジウムにあたっては次の3つの観点から、三氏に登壇していただいた。

（1）この時代は、工業化や市場経済が発展し産業構造が変化するなか、工場労働者・都市中間層の増大により都市への人口集中が進み、都市空間の近代化が進んだ。それを背景に、国民大衆による社会行動が現れ、大正デモクラシーの時節を迎えた。一九一〇年代までに、日露戦争の講話条約批判から日比谷焼き討ち事件、藩閥政府批判・憲政擁護運動等の大衆的な暴動事件もおきていた。一九一八年には富山県を皮切りに、高騰する米価の引き下げを求めた消費者運動としての米騒動が起きた。労働組合史[4]をみれば、一九一二年に創立されていた友愛会が、二〇年には大日本労働総同盟へ名称変更しながら、労働条件、生活条件の改善要求を突きつける労働組合としての性格を強めた。二〇年五月には日本で最初のメーデーが開催された。吉野作造による民本主義、大杉栄らによるアナキズム的な社会主義、賀川豊彦らの人道主義的な組合運動、そしてロシア革命を受けたマルクス主義・共産主義運動など、大衆化する社会を改善する方途を示す思想が注目されるとともに、実際の社会運動に発展した。

（2）文学においては、そうした社会情勢とかかわって新たな実践があらわれた。一九一〇年代までに、言文一致体に立脚した文学（おもに小説ほか散文）の定着をみたのち、二〇年代には前衛的な芸術運動、詩的言語の実験的な試みがおこった。そうした既成の芸術概念に対する切断意識をもった前衛的な芸術運動は社会運動と連動した。第一次世界大戦前からヨーロッパでは前衛芸術運動として未来派が現れていた。一九〇九年二月の未来派宣言は、いちはやく森鷗外訳によって伝えられた（「椋鳥通信」第三回、三月十二日発、『スバル』一九〇九・五）。しかし、そうした動きが日本で同時代的なリアリティをもって受けとめられるまでにはタイムラグがあった。二一年の平戸廉吉「日本未来派宣言運動」をはじめ、キュビスム、ダダ、表現主義などヨーロッパの芸術的前衛運動が受容され、日本の社会的現実と大衆運動や社会思想とがパラレルに、またリンクして展開したのは二〇年代だった。萩原恭次郎らによる雑誌『赤と黒』は「詩は爆弾である」という宣言を掲げ、詩人をアナキズム的なテロリストに、詩を爆弾に擬して宣言し、この時代の社会的矛盾や混乱を表現した。誌名は共産主義（赤）とアナキズム（黒）との対立よりも同根性を表現している。二五年刊行の萩原恭次郎『死刑宣告』は、村山知義らにより二四年創刊の雑誌『マヴォ』で展開された前衛芸術運動とのつながりから生まれた。そして、彼らの多くはアナキズムの思想やプロレタリア文学運動に親近する。二一年には、小牧近江ら秋田の同人を中心として雑誌『種蒔く人』が発刊された。この雑誌は、小牧が第一次世界大戦下のフランスで接したクラルテ運動を日本で展開する意図で発刊された[5]。その後、二四年創刊の雑誌『文芸戦線』に引き継がれ、プロレタリア文学運動として展開した。二六年九月号『文芸戦線』に青野季吉が「自然生長と目的意識」を発表したころを境に、マルクス主義に立脚し社会変革の「目的意識」によって組織化（ボルシェビキ化）されたプロレタリア文学運動が、内部分裂しながら展開した。

（3）第一次大戦を前後した都市への人口集中と大衆運動、そして二三年におこった関東大震災後の「復興」は、都市の新しい文化創造、新しい文学表現の気運に拍車をかけた。新旧交代の動きとも見られる。明治から続いた雑誌『文章世界』（二二年終刊）や『白樺』（二三年終刊）といった一時代を牽引した雑誌が終刊を迎え、文学をめぐる環境も表現方法も刷新されていく。二三年に、菊池寛によって『文芸春秋』が発刊されたが、翌年にはその菊池によって見出された川端康成、横光利一ら新進作家たちが『文芸時代』を創刊し、新感覚派と呼ばれた。その後、プロレタリア文学運動に対抗して新興芸術派も現れた。震災以降、文学における都市の表象には、無産労働者・下層生活者に止まらず、都市で生活する新中間層が、社会層としての性格をもって取り上げられるようになる。都市の新風景・風俗などに見られたモダン文化は、都市生活者の新しい趣味や価値観の表現を生みだした。

以上のように一九二〇年代を三つの概括的観点からとらえ、大会当日は、およそこれに対応する三氏にご発表いただいた。ただし、発表内容はここで述べた論点とは合致しない。

大川真氏は、単著『近世王権論と「正名」の転回史』（お茶の水書房、二〇一二）があり、近世の政治思想史を専門とされる。吉野作造記念館の館長を勤められ（発表当時）、吉野作造の民本主義とこの時代に影響のあったクロポトキンのアナキズム思想の影響圏との関

係などについて研究されている。当日は、おもに（1）の観点から「大正デモクラシーにおける共同（協働）性の再編」の題で発表された。

村田裕和氏は、単著『近代思想社と大正期ナショナリズム』（双文社出版、二〇一一）があり、一九一〇年代のナショナリズムの思想に対抗した、大杉栄らアナキズムの思想・文学について論じた。一九二〇年代については、萩原恭次郎『死刑宣告』の詩的実験に関する論文「首のない体／字面のない活字―印刷術総合運動『死刑宣告』の身体性―」（『立命館言語文化研究』二〇一一・一）もある。思想と文学をまたがる論点をテーマとされてきた。当日は、おもに（2）の観点から「アナキズム詩の〈場所〉小野十三郎『半分開いた窓』を基点として」の題で発表された。

田口律男氏は、単著に『都市テクスト論序説』（松籟社、二〇〇六）があり、第二章では「一九二〇年代・都市」を視座として」の題のもと、新感覚派・横光利一の小説をとりあげて論じている。従来、プロレタリア文学派と新感覚派は、その文学観や派としての対立を前提に別々に論じられることが多かったが、田口氏が取り組んできた身体・都市の表象という観点からのテクスト分析は、そうした分け方を横断する可能性をもちうる。当日は、おもに（3）の観点から「「都市」という共通分母」の題で発表された。

三氏の論考は別途掲載されるのでここでは立ち入らない。以下では、上記三つの観点の間に横たわる問題領域を提示しながら、片岡鉄兵「生ける人形」を取り上げて論じ、今後の研究展望としたい。

三　「無産階級」と社会運動・思想・文学

二〇年代に広く用いられ、グローバル化と大衆化を示す言葉に「無産階級」がある。とともに、「階級」とは別の視角、ときに「階級」問題に対して批評的意味を担ったのが「女性」である。以下では、この二つの語を視角として二〇年代の問題領域を提示してみたい。

林宥一[6]は、「無産階級」の政治・経済的な社会的顕在化の歴史的経緯を論じた。そのなかで明治期には自由民権運動以来、「紳士」に対して「平民」の語が対置されたが、一九一〇年代から「無産階級」の語がプロレタリアートの訳語として散見され、二〇年代から定着することを指摘した。その最初に大宅壮一「一九三〇年の顔」（『中央公論』一九三〇・十二）に言及している。大宅は、印刷会社で頻用される「二つの活字」から、この時代の世相を述べていた。

東洋一を誇る某大印刷会社の職長の話すところによれば、鋳造しても鋳造しても、すぐにまた不足をつげる二つの活字がある。それは「女」と「階」の二字であるが、殊に前者に対する需要は最近急激に増大し、一万個のストックが大抵いつでも、すつかり出払つてしまつてゐるといふことである。

「階」はいふまでもなく「階級」その他の熟語をつくるのに必要な字であるが、「女」といふ字が使用される場合は、今更説明するまでもないであらう。しかもこの二種の活字に対する需要が最近幾何級数的に増大したといふこの一事実は、一九三〇年の社会相を具体的に特色づけるものではなからうか？

「階級」と「女」――この二つのコンビネーションによつて、何人の頭に浮かんで来るものは、あの有名な独逸の漫画家ゲオルゲ・グロッスの作品である。

述べているのは「一九三〇年の社会相」だが、この年急に現れた現象ではなく、この年に至っていよいよ関心が高まっていることを示す言葉が「階級」と「女」だったと解してよいだろう。「階級」とくに「無産階級」という言葉が散見されるようになるのは一九一〇年代である。朝日新聞の早い用例をみると次のような記事がある。

今次の欧洲戦争が各国の社会主義に与へたる教訓は甚だ大なるものあり。社会主義者は平生極端に戦争を非認して曰く、戦争は国内に於ける有産階級紳士階級が其の勢力地位を維持し、若くは増進せんが為に企つる所にして、無産階級細民階級に在りては徒らに身を鋒鏑に委するの愚を演ずるのみにして、毫末の利益なし。

（「戦争と社会主義」、『大阪朝日新聞』一九一五年四月二十七日）

第一次世界大戦中のヨーロッパの状況を報じ、戦争に対する社会主義者の立場を述べるなかで、「有産階級紳士階級」に対する「無産階級細民階級」に言及している。「無産階級」は、「有産階級」とセットで、資本主義社会の「階級」構造的な認識を示す語として広がりを見せた。それが二〇年代だった。「階級」概念が、ヨーロッパ経由の社会理論とともに、すなわちグローバル化のなかで、大衆的な広がりをもって認識されたといってよい。

普選獲得運動では、憲法にもとづいた民主主義の実質化、無産階級を含む大衆的な選挙権の拡大を主張した。また、経済的な労働条件の改善を求めた労働運動は、無産階級の社会的不平等の是正要求として盛んになった。ただし、それらに関わる思想の間には対立的な争点があった。また、普選は男子普選であり、労働運動の担い手は男性が中心となった。婦人運動も起こるがなお二次的な位置にとどまった。

政治の大衆化へ向けた運動は普選運動として展開したが、そのイデオローグが「民本主義」を論説した吉野作造だった。吉野は、民本主義と無産階級との関係についても論及した。それに対して、アナキストの大杉は、否定的に応えた（「盲の手引きする盲―吉野博士の民主主義堕落論」、『文明批評』一九一八・二）。大杉は民主主義の自己目的化の弊をついた。とともに、アナボル論争のなかでは、ロシア、日本におけるボリシェビズム的な組織的革命運動とも距離をおいた（「何故進行中の革命を擁護しないのか」、『労働運動』一九二二・九）。大杉の論点は、国家制度としての民主主義、革命実現のための組織運動が、ともにもたらす自己目的化と排除の原理に対する批判にあった。

普選運動、労働運動とともに、大衆化の動向と連動した思想・文学における表象も活発になる。だが、その場合、基本的に男性を主体とする視点や語りによって、「女性」は他者として捉えられた。

日露戦争後、婦人運動の火付け役的な役割を果たしたのが一九一一年創刊の雑誌『青鞜』だった。山川菊栄[7]は「四年半にわたる「青鞜」の活動は要約すれば女性の人権の主張、家族制度への反抗という一言に尽きましょう」と評した。『白樺』との近接を感じさせる雑誌装幀と「ロマンティックで貴族的、高踏的なにおい」をもった文学雑誌的な性格から出発し、婦人問題に触れた論説を掲載した。終刊時の編集者は伊藤野枝だった。

大杉栄は、自らの活動の根柢には、「本能」「生」の「創造」「拡充」という衝動があることを述べた。「生の拡充」（『近代思想』一九一三・七）では、「久しく主人と奴隷との社会にあった人類は、主人のない、奴隷のない社会を想像する事が出来なかった」が、「人の上の人の権威を排除して、我みずから我を主宰する事」に「生の真の拡充」があるとした。そして、「主人」たる社会的な「権威」に対する「反逆の中に、無限の美を享楽」することに「僕のいわゆる実行の芸術」があると述べた。大杉が志賀直哉に親近したのも、「生の拡充」「生の創造」という動機の部分への共感にあっただろう。そして、女性の立場を論じた伊藤野枝との共感もここにあったであろう。それは、論点や立場、表現様式の違いを含みながら、『青鞜』と『白樺』と『近代思想』という雑誌に関わった人びとの共感の根でもあったのではなかったか。生の創造・拡充というモチベーションにとって、社会運動と思想、文学という表現手段の弁別は二次的なものである。

文学におけるアナキズム的なアヴァンギャルドの初発的な動きは、旧来の様式に対する破壊と反逆、ジャンルの越境を意識した方法論と実践に向かった。平戸廉吉の未来派宣言は、日比谷公園という場で、宣言ビラを撒く行為として表現すること自体に意味があった。『赤と黒』の宣言「詩は爆弾である」に端的に示されたように、二〇年代前半における前衛的な表象は、まずは社会的混乱を混乱のままに、旧来の秩序を破壊する反逆の衝動を、斬新な手法で表象するものだった。萩原恭次郎の詩は、諸階層の同居する都市を表象するに、文法の破壊、言語の視覚的構成を駆使した。アヴァンギャルドは欧米においてそうであったように、美術、音楽、文学、演劇（舞踏）、建築といった境界を越えた芸術運動として展開した。その中心的な役割を担ったのが村山知義だった。

四　「女性」の表象

本シンポジウムのなかで、二〇年代に注目された主題でありながら、取り上げられなかった観点の一つに、「女」性の表象がある。明治以来、女性の社会的立場や権利をめぐる運動は起こっていた。男女間の相互承認をめぐるミクロな政治としての恋愛は、結婚という性差の制度との関係も含めて、大正期にホットなテーマとなった。[9]『青鞜』の活動は、「女性の人権」「家族制度への反逆」にあったと山川菊栄は評した。一九一〇年代、創刊間もない『青鞜』でイプセン「人形の家」のノラは自立する女性の参照項となった。衆目を集めた恋愛事件もおきた。大杉栄と伊藤野枝、神近市子の日蔭茶屋事件（一九一六年）もその一つである。「生の拡張」としての「実行の芸術」は、女性の生の自由と、家族制度、恋愛―結婚における性差などの問題にも届いた。女性は、政治的な公民権をもたず、家族制度の法的慣習的な拘束による不自由、経済的自立の困難を抱えた。そうした女性を表象することは、私的生活圏と公共圏との間の領域にまたがり、階級問題からも洩れる問題の所在を突きつけた。二〇年代後半のプロレタリア文学運動は、「目的意識」にしたがった「組織」運動を志向した。だが、そのとき政治目的に従事する男性に従属する女性の存在（ハウスキーパー問題）という矛盾を露呈させた。

こうした問題を提起した文学者に平林たい子がいる。平林は、長野県諏訪高等女学校在学中から社会主義思想に関心を示し、卒業後

すぐに上京し電話交換手となる。が、ほどなく解雇。堺利彦に紹介された日独商会でアナキストの山本虎三と知り合う。二三年、メーデーでのビラ撒きで検挙されたのちに京城へ一時渡った。同年九月の関東大震災では予防検束され、虎三の兄夫婦を頼って大連に渡った。そこで、虎三は摂政宮成婚に反対する友人のビラ撒きに関与したことから不敬罪で入獄。その間に平林は出産するが、子供はほどなく死亡。のちに、これをモデルとした「施療室にて」（『文芸戦線』一九二七・九）を発表した。大連から帰国後、『マヴォ』同人の高見沢直路（田河水泡）、岡田龍男、飯田徳太郎らと交際。アナキスト、前衛芸術家たちの周辺で作品を書き始めた。平林の作品は、自らの体験をモデルにしたものが多いが、岡野幸江[10]が論じたように、性差、階級、民族の差異の間におかれた女性を形象化した。岡野は「公式的な理論に囚われることのない独自の感覚から、最も弱い立場のものに光りを当て、彼らの持つ力をすくい上げ、そこに希望を見出していくたい子の作品は、人間の自由の問題を階級闘争だけに還元するのではなく、また性の問題だけに焦点化するのでも、ナショナルな空間に限定するのでもない。むしろそれらすべてを統合したところから考えようとするダイナミズムをはらんでいるのではないかと思う」と評している。

『放浪記』（最初の連載開始は『女人芸術』一九二八・一〇）がベストセラーとなった林芙美子も、九州で行商する両親とともに転居を繰り返し、特定の場所としての「古里を持たない」幼少期を過ごして、尾道の女学校を卒業後、恋人を頼り上京。恋愛は結婚に実らず、東京でアナキストたちの周辺にいた。林は、無産階級の人々のなかで育ち、東京での貧しい暮らしのなかで、女中、事務員、女給などの仕事を転々としながら作品を書いた。だが、林は前衛的なアナキズムとも、プロレタリア文学とも距離をおいた。『放浪記』は、問題提起的であるよりも、唱歌や流行歌から、短歌、自作の詩等々を織り交ぜて、この時代の近代都市の生態を、自立を志す女性の視線で描いたところに共感を得たといった方がよい。

二〇年代は、平林や林のように、女性作家が増え始めた時代である。だが、書き手の性に関わりなく、「階級」とともに、「女性」は都市文化の新しさ、規範や価値観の地殻変動を象徴するものとして表象された。言論では婦人問題として、文学では時代の変化の尖端として表象された。都市文化のなかの女性は、新しい文化の魅惑的中心として、旧来の論理から洩れ逸脱し揺るがす問題提起的な形象だった。

女性が社会層として顕在化した背景の一つに、大正から昭和にかけての女学生数の急増があった。高等女学校数は、男子の中学校に対応する形で位置づけた一八九九（明治三二）年の高等女学校令以後増え続け、中学校数と比べ「大正一〇年（一九二一）においてほぼ同数となり、それ以来追い越している」。生徒数においても昭和初期には中学校進学者数に追いつき追い越した。[11]平林も林も、こうした背景のなかで進学し、ともに一九二二年に卒業した。

都市では、タイピスト、事務員、看護婦などの職業婦人も増加した。この時期都市の消費文化を象徴する存在として注目されたのがモダン・ガールである。鈴木貞美[12]は「モダン・ガールを、明治末から大正期の思想風俗と区別するのは、震災からの復興を契機に形成され

る前期都市大衆社会を基盤にしていることである」とする。そして、欧米映画の影響を受けながら、断髪から洋装、立ち居振る舞いにいたるまで「旧弊な風俗から身を解き放とうとする要求」を表現することで古い価値観から解き放ち、女性の規範と価値観をいわばソフトパワーで転換変容する時代の動きだったと指摘した。明治末の「新しい女」から大衆的な裾野を広げつつ、都会を闊歩する「モダン・ガール」を時代の尖端とし、社会層としての女性が顕在化した。

　都会の歓楽街の様子も大正期には変化を見せた。一九一六～一七年発表の永井荷風の小説『腕くらべ』は新橋の芸者を描いた。だが、二〇年代にはカフェが急増する。カフェは疑似西洋体験的な飲食店として大正期に増え、「昭和になるとカフェーは、日本的な酒場としてますます独自の展開を見る」。とくに大阪で合理化と近代化、大店舗化して、東京へ進出したという。[13] 一九二九年十二月号『中央公論』には、村島帰之「大阪カフェー弾圧史」が掲載されている。「遊女文化──若しそういふ事が出来るなら──芸者文化の大阪は、女給文化の大阪へ、移行しつゝある」という。労働運動が盛んになると店の客だった労働者たちに刺激され「女給同盟」ができた。労働運動と「女給」文化との遭遇は、都市における「階級」と「女」の接触といえる。その後、ダンスホールなどへ業態を広げるなか、街の風紀を乱し、喧嘩や浪費による事件の発生を招くことから警察の取締強化、法令の制定等、経営条件が制約される。同記事は、取締強化の結果、諸条件を満たす大店舗が残り、中小店舗が淘汰されたと報じた。大宅が「一九三〇年の顔」を発表したのと同じ時、三〇年十二月号『改造』には、石浜金作「大阪カフェの東京侵略」が掲載された。「東京に相当な資本を以て進出してきた事」を記している。大阪から東京へのカフェ進出後、広津和郎『女給』（一九三〇～三二）、荷風『つゆのあとさき』（一九三一）などが東京の女給を描いた。政治・経済的な女性の権利獲得は男性に遅れたが、「女性」は大衆化する都市文化の変容に街路でかかわった。

五　片岡鉄兵「生ける人形」

　民主主義的な国家─国際主義、ロシアを中心とした革命思想と運動から、都市文化としてのアメリカニズムまで、思想から都市風俗にいたる世界的同時性の波が日本にも届き、大衆の動向にも影響の広がりを見せた二〇年代。それを象徴するのが「階級」と「女性」だった。

　こうした観点から、一つの小説を取り上げたい。片岡鉄兵「生ける人形」[14]である。この小説は、一九二八年六月七日から七月二一日にかけて、大阪・東京朝日新聞に連載された。前年には昭和金融恐慌が生じ、二八年二月に最初の普通選挙、三月に三・一五事件、対外的には二七年から中国問題により山東出兵が起こっていた。この小説は片岡が左傾した直後の作品として知られる。ただ、イデオロギー的な側面は余り表立たない。マルクス主義、プロレタリア文学であるよりも、二〇年代の東京という近代都市における政治・経済システム、そのなかでの規範や価値観の変転を織りこんだ都市小説として読める。ここでは「階級」と「女性」を観点に読み解いてみたい。

　まず、主人公瀬木がどのような人物として形象化されているかを確認してみよう。瀬木は「故郷」で政党院外団員だった。政党院外団[15]は、一九一二～一三年に桂内閣を総辞職へ追いこんだ大衆暴動、第一次護憲運動で浮上し注目されたという。議員集団としての院内の党本部に対する、議員以外の支持者・活動家集団で、政党の外延をなす。院外で政治運動にかかわる青年層（院外青年）も現れ、昭和初期には暴力団、右翼団体的な組織との関係もできたという。瀬木は「地方の院外団員として、この数年来辣腕を振つてまうけたこともまうけたけれど、それは多く遊蕩につかつてしまつた」と描出されている。瀬木は「代議士になる夢」をもって東京へ来て「日比谷に近い処に居る」。現国会議事堂が完成するのは一九三六年で、それまでの旧国会議事堂は日比谷公園にほど近い麹町区内幸町二丁目（現在の霞ヶ関一丁目）だった。萩原恭次郎の詩「日比谷」（前掲『死刑宣告』所載）には「高く　高く　高く　高く　高く聳える／首都中央地点─日比谷」（／は改行、原文は後半字体が大きい）の詩句がある。「日比谷に近い」とは「代議士になる夢」に近い場所の含意がある。瀬木は丸の内のビルに事務所のある「繁本興信所」に勤めるサラリーマンである。今和次郎編『新版大東京案内』（中央公論社、一九二九・十二）には「東京の顔」として建築が紹介されている。当時の名物は、一九一四年に開業した東京駅の隣に、一九二三年、地上八階地下一階建で竣工した丸の内ビルディングだった。それより前一九一八年に竣工し「我国の高層貸事務所建築の先鞭を付けた」のが七階建の海上ビルディングだった。瀬木の通う事務所はこのビルが想定されているだろう。窓外には皇居（「お城の森」）が広がり、直下は濠端の通りで、瀬木は「この大通りを自動車で、日比谷へ走らす」ことを夢見ている。その事務所へ瀬木は、「忙しい事それ自身が快楽だ」というように、「軽快」に「快く気取つて歩い」て通勤するビジネスマンを装っている。ところが、この事務所には大した仕事もなく「退屈」である。

　そんな折、自分に興信所の職を紹介してくれた青原代議士と待合で会う。芸者との会話から、青原が玉屋銀行から不良貸し出しを受けて選挙資金としたことをかぎ出す。瀬木は興信所の社長と図り、預金者に不良貸し出しの実態を暴露して預金取り付け騒ぎを煽る一方、玉屋銀行をX伯爵の銀行に合併させ、自分たちが青原への債権を取り立てることで利益を得ようとする。

　その間、瀬木は、事務所のタイピスト弘子に言い寄りつつ、他方、かつての下宿先の娘で今は未亡人となっていた梨枝子と同棲する。

　政党政治というシステムに代議士として参入するための選挙。選挙のための資金を貸し出す銀行。その銀行は無産者の預金を資金としている。そうした連関の間で不正が起こる。それによって青原は代議士となり、その青原によって瀬木は興信所の職を得ている。瀬木は先輩青原代議士の不正を暴き利益を得ることで自らの「立身出世」を画策する。恩人を裏切ってでも自己の出世欲を実現しようとし、「何物か、黒い魔の手が、自分を操つてゆくのだ！」と感じる。「自分は、その魔の手と握手することで、立身出世をはかるのだ」。しかし、それによって逆に翻弄される「生ける人形」として瀬木は形象化されている。

　「階級」の観点から見れば、瀬木は無産労働者階級／有産資本家階級のどちらにも帰属しない。代議士を夢見ることの背景には、一九二五年の普選法成立、二八年二月の第一回普通選挙がある。普

通選挙を時代の必然として見すえ、政党政治を民主主義の本道ととらえた吉野作造は「無産政党問題に対する吾人の態度」（『中央公論』一九二五・一〇）で、民衆と政党の関係について、民衆は政党に加入すべきではないと説いた。「政党は政治家の作るものであって、政治専門家でない一般民衆はこれに加入すべきでない」。というのも、「もし我々一般民衆が政党に対して超然たる態度を維持しいずれにもあれ良い方に賛成すると構えて居れば、各政党はこれらの投票を得るために嫌が応でもよい事をなすに競争せざるを得ぬことになる」からである。政党間で「よい事をなす」政策競合が促進されるためにも、「一般民衆」は特定政党に所属することのない、無党派であるべきだと説いた。瀬木が「立身出世」のために志したのは「政治家」だった。が、代議士への足がかりは得られない。それでも「一般民衆」に収まる気持ちにはなれず、夢は諦めきれない。かといって議会制民主主義とは別の仕方に可能性をみるアナキストにも、無産階級を先導する革命的コミュニストにもなれない。「階級」の観点からみて、有産資本家／無産労働者のいずれにも属さず、また知識人など第三極の立場にも立てず、いずれともつかない中間に浮遊する人物として形象化されている。そのことは都市・ビルディングなどの背景と関連づけて描かれる。冒頭、瀬木は颯爽と歩いて七階の事務所にたどり着く。だが、得意げな歩き方とは裏腹に仕事がない。この男は、地方と中央を結ぶ東京駅、日本の中央としての日比谷に近いビルにいる。「七階」は階級の上昇志向を意味するだろう。が、代議士として中央の人にはなれない。他方で「七階」は、地に足の着かない浮遊性の意味を帯びる。一九二七～二八年には山東出兵が起きていた（連載直前の二八年五月に第三次出兵）が、事務所の同僚三木が徴兵され「支那」へ行く。その歓送会後登楼した遊郭の支払いに必要な「給与」の遅れをめぐって、瀬木と同僚たちとの不仲が顕わになる。瀬木の企みは失敗し、社長や同僚との行き違いから「大都会を一文なしの流浪人としてさまよう者」として事務所を去る。そのとき、事務所のあるビル下の大通りにはメーデーで行進する労働者の列があった。だが、瀬木はその列にも入れない。

一方、「立身出世」の欲望とともに、この男は、女性への欲望によっても翻弄される。諸岡知徳[16]は、片岡のモダン・ガール表象をとりあげ、「生ける人形」について、弘子の形象を新聞連載時の挿絵や同時代のモダン・ガール表象と比較しながら論及し、「既成の性道徳に対する積極的な否定」をするところに意義を見た。ここでは、弘子とともに梨枝子が配され、それら女性との関係において瀬木が形象化されていることに留目したい。弘子は非婚論の「モダン・ガアル」として、梨枝子は生活のために結婚した「明治時代の女の遺物」として形象化されている。瀬木は性的対象として弘子に接近する。弘子は「現代の制度では、女は、結婚して決して幸福にはなれない」という「非婚論者」である。「この世の中の法律と、習慣と、伝統とは、女の自由を束縛してゐる」。結婚のための恋愛ではなく、「執着のない、疑惑のない、嫉妬のない、悲劇のない、涙のない、明るい、美しい、生々とした恋愛」をしたいと思う。が、実行するのは恐ろしいと思っている。瀬木は言い寄るが、拒絶される。他方の梨枝子は、「瀬木が二十の時上京して、同郷の関係で二階を借りた家の娘だった」。そこで「二人の少年少女は結びついた」。しかし、梨枝子は親のいうまま、歳の離れた「ある中等の会社員の所へ嫁入」りし「生活の安定」を得た。ところが、夫の死により未亡人になった。男は「就職難」から経済的自立と婚期が遅れ、女は「生活の安定」を求めるため、「新婚の男女の年齢の開き」が生じるという社会構造上の連関が結婚にはあるとされる。梨枝子はこうした社会構造的な「悲劇の経験」者だと描出される。梨枝子の結婚生活は「家庭における事務的な協労者」たるにすぎなかった。とはいえ、梨枝子は結婚生活を通じて「スッカリ亡夫の影響で変形し」、「瀬木の影響力の割込んでゆける余地」はなかった。常に亡夫の影をみる瀬木は「嫉妬」し、結局「生活の便利」のために利用し合って同棲している。「生活費」をめぐるいさかいも絶えない。

「生ける人形」は、近代都市のなかでシステムの隙間、新旧価値観の間で、立身出世を画策しながら蹉跌する男を描いた。瀬木は、「魔の手」に導かれて「立身出世」を図るが失敗する。また、「女性」との関係でも、相手に翻弄され支配的な立場に立つ〝男〟たりえない。空回りと不運に見舞われ、主体的な自律の規範を見失い、都市に浮遊する人物として形象化されている。この小説が軽薄な風俗小説に見えるとすれば、旧来の規範や価値観の崩壊に直面しつつ、確かで新たな規範や価値観も見出せない時代の転変、浮動性を悲喜劇的にとらえたからだと言える。一九一〇年代、イプセン「人形の家」のノラが家・男から自立する女性の形象として論議されたが、二〇年代の「生ける人形」は近代都市のなかで失調する男を描いた。

六　錯綜としての〝中間〟

グローバル化（世界的同時性）と大衆化の一九二〇年代には、国民大衆は、一方で政治参加の権利を拡大し市民としての位置づけを得はじめることと、他方で国際的な覇権抗争のなかで国家の臣民として位置づけられ管理統治されることとの間にあった。こうした動きに関わって大正デモクラシー、アナキズム、労働運動、革命運動などの思想と社会運動が活発となった。

一方、政治的な社会変動の土台ともなる産業構造の変化は、都市を、帰属の定かでない群集のうごめく異種混交的な錯綜の場と化した。「ジャズ」や「カクテル」「交響楽」といった言葉で、都市モダニズムは表現された。それは、資本家／労働者という対立的な階級差に還元できない都市中間層の顕在化でもあった。[17] 一九二九年一〇月刊、浅原六朗『都会の点描派』（中央公論社）巻末には、二〇年代にヨーロッパ各地を旅行した見聞記である谷譲次『踊る地平線』、近代都市東京の現在を記録した今和次郎編『新版大東京案内』の広告が載る。とともに、本書も含む「中間物選集」の広告が掲載された。柳澤健『巴里を語る』、新居格『近代明色』、石川欣一『山へ入る日』、林房雄『都会の論理』、大宅壮一『文壇縦横論』、下村千秋『月寒の女』、ささきふさ『或る断層』、高田保『雑・エトセトラ』、小島政二郎『場末風流』が並ぶ。ここでいう「中間物」の意味は定かでないが、〝現在〟のグローバル化し大衆化する都市に軸足をおいたエッセイを基調としている。宣伝文句には「ジャズとキネマとダンスのモダーンライフ！　自動車と高層建築とスポーツの都会交響楽！　感覚的な機知に富んだモダーンナンセンス！　そしてマルキシズムとアメリカニズムの街頭

行進曲！　この近代的カクテルを召し上れ！」とある。海外への視線。東京の新風俗。グローバルな世界的同時性をもったイデオロギーの対立。それらが異種混交して熱狂する様相そのものを捉えようとした惹句である。「生ける人形」も、そうした同時代的な様相を織りこんだ小説である。

こうしたモダン文化を軽佻浮薄と批判することは容易だが、しかし、そうして錯綜化した社会を方向づける思想や社会統治の方法、そして個々の生き方の規範、管理統治が強化されるなかでの文学の方法は、容易に見出せなかった。二〇年代から三〇年代の境目、一九三〇年前後には、二九年の世界恐慌、三一年の満洲事変が、グローバルな政治・経済的連動によって起きた。大衆的な都市モダニズムの高潮期であったとともに、そうした危機が、大衆を国家主体に従属する国民として凝集させ、総動員していく時代に向かった。

一九二〇年代の文化と思想を、改めて子細に観察し、再検討する視線を、どこへ向けることが今重要な意味を持つだろうか。二〇年代には、資本家階級／無産階級という対立関係で社会が捉えられるようになったとともに、そうした対立関係だけでは捉えきれない都市中間層も顕在化した。大衆化とは都市を中心に社会が多様な層の錯綜として〝中間〟的様相をみせはじめたことを意味する。この様相を、特定の立場・階層からのみ捉えること、全体論的本質論的な視座から捉えることによってではなく、複眼的な視線を保持しながら中間に錯綜する幾つもの微細な分節や境界に目を向け、差異と関連性の相関的で流動的な動態を見定めることによって捉えることが重要な視点になるのではないか。抽象的な展望に過ぎないが、シンポジウムを経た私の研究展望の指針はそこにある。

注

（1）笠井潔「ゆたかな社会」の明るい地獄」（『探偵小説論Ⅲ　昭和の死』東京創元社、二〇〇八・一〇）は、二〇世紀前半の「世界」戦争をグローバル化の第三段階「世界戦争」の時代として論じた。

（2）篠原初枝『国際連盟　世界平和への夢と挫折』（中公新書、二〇一〇・五）

（3）坂野潤治『〈階級〉の日本近代史　政治的平等と社会的不平等』（講談社選書メチエ、二〇一四・十一）九二～九三頁。

（4）小林端午『日本労働組合運動史』（青木書店、一九八六・一〇）「第一章　明治・大正時代における労働組合中央組織の結成と分裂」

（5）北条常久『「種蒔く人」研究―秋田の同人を中心として』（桜楓社、一九九二・一）

（6）林宥一『「無産階級」の時代　近代日本の社会運動』（青木書店、二〇〇〇・六）。「第一章　階級社会状況の成立」で、「無産階級」という語が国語辞典に現れる時期を手がかりに、この言葉が流行し始めたのは一九二〇年代であるとし、それまで「平民」と訳されていた「プロレタリアート」の訳語として定着したことを指摘している。

（7）山川菊栄『日本婦人運動小史』（大和書房、一九七九・四）。引用は新装版（一九八一・十一）。

（8）飛鳥井雅道「解説」（『大杉栄評論集』岩波文庫、一九九六・八）に指摘がある。

（9）菅野聡美『消費される恋愛論―大正知識人と性』（青弓社、二〇〇一・八）

（10）岡野幸江『平林たい子―交錯する性・階級・民族―』（菁柿堂、二〇一六・六）。この後の引用は、一二六頁。

（11）唐澤富太郎『女子学生の歴史』（木耳社、一九七九・四）一六二～一六三頁。

（12）鈴木貞美『モダン都市の表現　自己・幻想・女性』（白地社、一九九二・七）「第三章　モダン・ガール、そして小説の中の彼女たち―女性的なるものをめぐって」

（13）橋爪紳也『モダン都市の誕生　大阪の街・東京の街』（吉川弘文館、二〇〇三・六）「カフェー　疑似西洋の空間」

（14）本文は『片岡鉄兵全集　第二巻　鉄兵傑作全集1』（非凡閣、一九三六／復刻、日本図書センター、一九九五・二）に拠る。

（15）高橋彦博「院外団の形成―竹内雄氏からの聞書を中心に―」（『社会労働研究』一九八四・三）、伊藤久智「政友会の院外団と「院外青年」」（安在邦夫、荒船太郎編『近代日本の政党と社会』日本経済評論社、二〇〇九・十一）

（16）諸岡知徳「モダン・ガールはいかに書／描かれたか―片岡鉄兵と通俗小説の時代―」（『神戸山手短期大学紀要』二〇一一・十二）

（17）こうした背景の中での文壇の動向について、拙論「1930年前後における経済小説の萌芽―プロレタリア文学派と新興芸術派との接近―」（『秋田大学教育文化学部紀要』第七二集、二〇一七・三）で論じた。

（やまざき　よしみつ・秋田大学准教授）